

目が覚めると、僕は見知らぬ部屋でコタツに入っていた。体をゆつくりと起こす。鈍い痛みが頭に走る。頭をさすりながら俺は思う。

「なんだ？」

昨日の記憶を必死に辿ってみる。わずかな記憶の破片のようなものが頭の中に浮かんで消えていく。

駄目だ。思い出せない。

部屋を見回す。正方形の白い部屋。中央の赤色のコタツ以外には何もない。窓も扉もない。

真っ白で殺風景。

その時、俺の伸ばした足の先に何かが触れた。驚いてコタツの中を覗いてみる。二本の足が向こう側の布から内側に向かって突き出ているのが見える。慌てて立ち上がり、コタツの向こう側、つまり死角になっていた部分を覗き込んだ。

真白

一人の女性が寝っ転がっている。

寝息を立てて気持ちよさそうに眠っている。

歳は俺と同じくらいの二十前後だろうか。髪は首元でバツサリと切られ、青色と銀色を混ぜたような色で染めてある。整った顔立ちをしており、可愛いというよりはカッコいいという印象を受ける。

まじまじと彼女の寝顔を眺めていると、その視線に気がついたのか、「ふうん」と唸って彼女も目を覚ました。彼女はシッパと目を細めながら言う。

「ああ、起きたんだ。おはよう」

なにがなんだか。

わからない。

見知らぬ部屋、見知らぬコタツ、見知らぬ人物に見知った感じの挨拶。

再び頭が鈍く痛んだ。

彼女は不思議そうにこちらを見つめている。やがて僕は絞り出すように言った。

「君は誰？」

彼女は首をかしげる。

九十度くらい。

やがてボン、と手を叩いた。

「ははあ。どうやら麦草くんは記憶を失ってるみたいだね。私は節足動物エバンジェリストの万畑。君の仕事仲間だよ」

「……記憶を失ってる？」

「そう。私がヌーの骨で君の頭を殴ったから」

「なんで？」

「それは、麦草くんが島の守り神の怒りに触れるようなことをしたからだよ」

彼女は僕を非難するようにそう言った。

ははあ。

なんにもわからん。

「勘違いするなよ。私は麦草くんを助けるために殴ったんだからな。そもそも君が食べるなど言われていたキャツサバを食べたのが悪いんだし。それに私は初めからアフリカに寄るのを反対してたんだ。それなのに君は強引に飛び出してさ。まったく。まあでもホント、タイムトラベルに支障が無くてよかったよ。あと一日くらい着くみたいだから準備はちゃんとしといてね」

「なにが？」

僕がそう言うと、彼女は目を見開いた。

「もしかして、全然記憶が無いの？」

「おそらく」

「まいったな。強く殴り過ぎたか」

彼女は額に手をあてた。

なにやらうんうんと唸っている。
やがて意を決したように顔を上げた。

「三日くらいで記憶は戻るはずだけど、もうそんなに時間が無いから一から説明する。私たちは今、タイムマシンで1926年のイタリアを目指してる」

「なんで？」

「そこで開催されるトマト祭りに参加するため」

「なんで？」

「そのトマト祭りのせいで、2050年に人類が滅亡する。それを阻止するために私たちは、このコタツ型のタイムマシンで時間を遡ってるわけ」

「なにが？」

「ここから大事なところ。計画だと、そのトマト祭りで表草くんはチンドン屋の格好をしながら、街を練り歩くことになってる。パンツ一丁だね。そしてその間に私は目的を遂行する。ここまでで何か質問は？」

「なんでトマト祭りで人類が滅亡するんだ？」

「そこで人が沢山死ぬから。その事件が巡り巡って、約100年後の人類滅亡につながる」

「それでなんでチンドン屋の格好をするんだ？」

「そこで起きる惨劇は音が重要な役割を占めてる。だから表草くんは音で注目を集めることになってる。多少危険だけど大丈夫。たとえ銃で撃たれたとしても表草くんは不死身だし」

「なんで？」

「私と結婚するから。でもそこはそんなに重要じゃない。他には？」

「なんでパンツ一丁なんだ？」

「股間を隠すため」

「……タイムマシンがコタツの形をしているのは？」

「それが最も効率の良い形だから」
「……………」

もう、考えるのは止めにしよう。これ以上考えてたら頭が変になりそうだ。

僕はきつとタイムトラベル中に、彼女が反対するなかアフリカに寄ることにして、禁じられたキャツサバを食べたかなんだかして島の守り神の怒りを買って、彼女に又一の骨で頭を殴られて救われたんだろう。そして僕は一時的に記憶を失い、そしてこれからその状態で、1926年のイタリアに向かっ、パンツ一丁でチンドン屋の格好をしながらトマト祭りで賑わう街を練り歩き、ときどき銃に撃たれながら彼女が目的を遂行することをサポートすればいいのだ。

どこに疑問を持つ必要がある？

これからやることはもう決まっている。そこに今さら僕の意思は必要ない。これがきつと正しい考え方なんだ。要は計画通りにしていれば、万事上手くいく。人類が救われる。どうせ三日後には記憶に戻る。ならばもうそれでいいじゃないか。疑問を持つこと自体が間違っている。どうせ聞いても分からない事なら、言われた通りにやっていたらいい。大いなる運命の下では、すべてが些細なことだ。

よし、もう考えるのは止めた。「なんでなんで」と言っている、彼女の負担が増えるだけだ。これからはすべてを受け入れていこう。

「オーケー。わかった。もう質問はしない。君の言うとおりにしよう」

「物分りが良くて助かるよ」

「これでも君の夫らしいからさ」

「言うねえ。あつはっは」

「あつはっはっはっは」
「ちなみに私はおならで宙に浮くことができる」
「なんで？」